

いわき市勿来園文学歴史館
令和4年度スポーツ展示

白木英尾

解説シート

白木英尾は前田夕暮に師事し、いわきの歌壇で活躍した歌人です。福島県歌壇の発展にも大きな足跡を残しました。本展ではいわき市立草野心平記念文学館に寄贈された資料を中心に、生涯をご紹介します。

生い立ち

白木英尾（本名：柏原英夫）は一九一一年（明治四四）年福島県石城郡赤井村（現在のいわき市平赤井）に父均、母カメの長男として生まれました。祖父柏原佐源太（方路）は明治の終わりに衆議院議員を務め、磐越東線の建設実現などの功績があった。一九一九（大正八）年父が、一九二〇（大正九）年祖父が亡くなり、英尾が柏原家の第一五代当主（方英）となった。



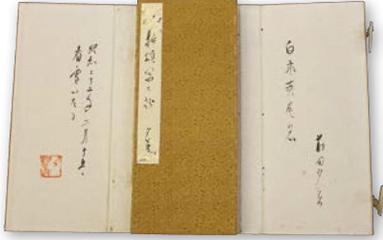
白木英尾 昭和15年・29歳頃
〔青天〕白木英尾追悼号より転載

一九二九（昭和四）年慶応義塾大学経済学部予科に入学したが、翌年、金融恐慌のあおりを受けて中退し帰郷した。福島農興銀行に勤務した後、磐城通運で定年まで勤めた。

ごろり寝ころんでさびしくてならぬ、木の葉よ落ちてこい（昭和一五）

前田夕暮との出会い

福島県立磐城中学校（現在の磐城高等学校）在学中に雑誌「若草」に短歌を投稿し始め、選者の前田夕暮を知り、一九三九（昭和一四）年師事した。一九四三（昭和一八）年には夕暮を常磐炭鉱へ案内し、戦時中は弟子の草野拓也に託して味噌や米などを夕暮の住む東京都杉並区荻窪に届けた。戦況悪化で休刊となっていた夕暮主宰の「詩歌」は一九四六（昭和二一）年英尾や阿久津善治などの尽力により郡山市で復刊した。一九四八（昭和二三）年夕暮は東北行脚したが、全行程英尾が同行し、いわきでは英尾宅に宿泊した。英尾は夕暮の晩年まで「詩歌」の発行に尽くし、夕暮は自筆の原稿や愛蔵の掛軸を贈った。



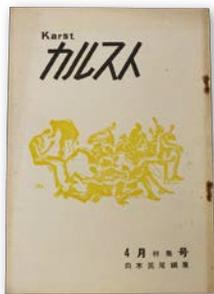
前田夕暮『新嶺富士抄』白木英尾宛献呈
署名入り（いわき市立草野心平記念文学館蔵）

むなしくて目をあけしとき庭にさす燈のなかの葉の花黒し（昭和二六夕暮逝去）

いわき歌壇の先覚者

英尾は高久晩霞とともに雑誌「詩南車」（昭和二〇昭和八年発行）を舞台にいわきの歌壇をけん引し、戦後の一九五五（昭和三五）年大内与五郎らと岩城歌話会を立ち上げ、歌壇の復興に力を注いだ。一九六〇（昭和三五）年雑誌「カルスト」がいわき市平の出版社氾濫社から刊行された。英尾のほか岡和一郎、波汐國芳、田中賢介、野本多霞夫、草野比佐男など多彩な顔ぶれが輪番で編集する意欲的な試みであった。

「カルスト」に善き隣人として集まれる人を思へば涙ぐましき（急坂）（収載）



「カルスト」
第1巻第4号
（いわき市立草野心平記念文学館蔵）

二冊の歌集

一九六五（昭和四〇）年第一歌集『急坂』を上梓した。少年時代の一時期をいわきで過ごし、英尾と親交があった中山義秀が寄せた文章が帯を飾っている。

わが生の一日一日を運びるこの石の坂急なるはよし（急坂）（収載）



中山義秀肖像
（中山義秀記念文学館提供）

一九九五（平成七）年には第二歌集『崖樹』を刊行した。出版記念会は妻の木坂啓子の歌集『川波』と共同で行われた。一九九六（平成八）年には福島民報出版文化賞を受賞した。

寂しめるとき胸奥にひとり思ふ「崖樹花を開くは少なり」（崖樹）（収載）

英尾の晩年

一九五二（昭和二七）年の福島県歌人会設立に関わり、一九六九（昭和四四）年から一九七二（昭和四七）年まで会長を務めた。福島県文学賞（短歌部門）審査委員、福島民報歌壇選者も務め、福島県歌壇の発展・向上に貢献した。その功績により一九八四（昭和五九）年福島県文化振興基金顕彰受賞、一九九一（平成三）年には福島県芸術・文化財保護功労者受賞。退職後には水仙短歌会などを指導して後進の育成に取り組み、いわき市市政功労者として表彰された。一九九七（平成九）年感染性褥瘡により死去した（享年八五歳）。

人を苦しめず自らも苦しまずひそやかにあれわれの晩年（平成九・「青天」一月号に掲載、最後の公表作の一つ）

白木英尾略年譜

西暦	和暦	満年齢	英尾の出来事	日本・世界の出来事
1911	明治44	0	4月9日現在のいわき市平赤井に父均、母カメの長男として生まれる。本名は柏原英夫。祖父佐源太(方路)は明治末頃衆議院議員を務め、磐越東線の建設実現や炭鉱経営などで活躍。	
1919	大正8	8	父死去。	
1920	大正9	9	祖父の死去により柏原家の第15代当主(方英)となる。	
1924	大正13	13	福島県立磐城中学校(現在の磐城高等学校)に入学。	
1928	昭和3	17	この頃から「若草」の短歌欄に投稿。選者の前田夕暮を知り、自由律短歌を作り始める。	
1929	昭和4	18	磐城中学校卒業。慶応義塾大学経済学部予科に入学する。	世界恐慌
1930	昭和5	19	昭和恐慌により親族からの学費援助が途絶したため大学を中退し、帰郷する。	
1933	昭和8	22	7月25日高久晩霞・片寄耿二・白木英尾編『はまゆふ』(「詩南車」終刊記念歌集)刊行。	
1934	昭和9	23	福島農興銀行に入行。	
1937	昭和12	26	5月30日「野麦」第1号刊行。7月25日平市制施行記念野麦俳句会が開催。10月10日「野麦」第1回短歌会がマルトモホールで開催。	日中戦争始まる
1939	昭和14	28	前田夕暮に師事。	第二次世界大戦始まる
1940	昭和15	29	初めて荻窪の青樫草舎に前田夕暮を訪ねる。	
1942	昭和17	31	福島農興銀行と勲業銀行との合併により退職。	
1943	昭和18	32	磐城通運に入社。10月前田夕暮が来磐。常磐炭鉱を案内する。	
1944	昭和19	33	召集、茨城県百里原海軍航空隊に配属。	
1945	昭和20	34	復員。	第二次世界大戦終わる
1946	昭和21	35	7月前田夕暮主宰の「詩歌」郡山市で復刊される。英尾も発行実務を助けるなど尽力する。岩城歌話会の創立に参画。	日本国憲法の公布
1948	昭和23	37	10月「詩歌」東京に移る。前田夕暮の東北行脚に英尾は全行程同行。古河好間炭鉱に夕暮を案内。夕暮は英尾宅に一泊する。	
1949	昭和24	38	「詩歌」発行が青樫草舎に戻る。宮柗二、佐藤佐太郎らと親交。	
1950	昭和25	39	岩城歌話会発足。秋、福島民報社主催の福島県短歌大会が郡山市で開催される。	朝鮮戦争始まる
1951	昭和26	40	1月「岩城歌話会年刊歌集」刊行。英尾が編集・校正・印刷などを担った。4月20日前田夕暮死去。	サンフランシスコ平和条約締結
1952	昭和27	41	福島県歌人会創立に参画。	
1955	昭和30	44	福島県歌人会副会長となる。	
1958	昭和33	47	短歌祭が平市商工会館で開催される。英尾の発案で草野心平・荒正人・佐藤佐太郎・宮柗二らが講演。	
1960	昭和35	49	1月雑誌「カルスト」氾濫社より創刊。翌年まで13冊を刊行。10月中山義秀と浄土平に同行。	日米新安保条約・地位協定の調印
1961	昭和36	50	いわき市立山田小学校歌作詞。	
1962	昭和37	51	2月8日母死去。いわき市立高久小学校歌作詞。	
1965	昭和40	54	第1歌集「急坂」を白玉書房より刊行。帯は中山義秀。9月17日出版記念会。	
1968	昭和43	57	現代歌人協会会員となる。	
1969	昭和44	58	福島県歌人会会長となる(～昭和47年)。木坂啓子と結婚。	
1970	昭和45	59	福島県文学賞(短歌部門)審査委員(～昭和48年)、福島民報歌壇選者となる。	
1972	昭和47	61	磐城通運を定年退職。	沖縄の本土復帰
1975	昭和50	64	第23回短歌祭がいわき市文化センターで開催される。	
1976	昭和51	65	福島県短歌賞審査員となる。	ロッキード事件
1982	昭和57	71	いわき地区の短歌サークルの指導を始める。	
1984	昭和59	73	福島県文化振興基金顕彰受賞。「詩歌」廃刊。	
1985	昭和60	74	青天短歌会が発足。歌誌「青天」の運営委員、副代表となる。	
1990	平成2	79	NHK文化センターいわき教室短歌講座講師となる。	東西ドイツ統一
1991	平成3	80	いわき市市政功労者、福島県芸術文化財保護功労者として表彰。	湾岸戦争始まる ソ連崩壊
1992	平成4	81	8月仙台市で開催の第9回青天全国大会集會に出席。	
1995	平成7	84	第2歌集「崖樹」を角川書店より刊行。6月4日出版記念会。	阪神淡路大震災発生
1996	平成8	85	「崖樹」が福島民報出版文化賞を受賞。	
1997	平成9		1月21日感染性褥瘡により死去。常勝院岩城寺(いわき市平中平窪)に眠る。	

印刷
株式会社植田印刷所
〒974-8261
福島県いわき市植田町中央2丁目
6番5号

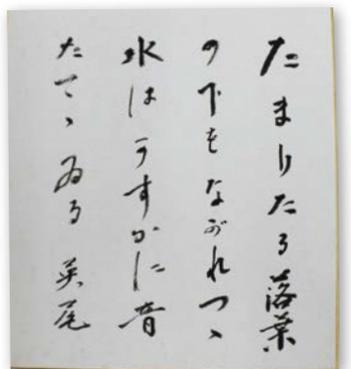
発行日
2022(令和4)年9月24日
編集発行
いわき市勿来関文学歴史館
〒979-0146
福島県いわき市勿来町関田長沢
6番地の1
TEL(0246)65-6166

会期
2022(令和4)年9月24日
11月15日

スポット展示1
「白木英尾」

協力者(順不同・敬称略)
いわき市
いわき市立草野心平記念文学館
中山義秀記念文学館
いわき市立いわき総合図書館
小野洋子
伊藤正幸

主な参考文献
「青天」第一四巻第八号 青天短歌会
(一九九七)
『東北近代文学事典』勉誠出版(二〇一三)
『福島県歌人会五十年史』福島県歌人会
(二〇〇二)



白木英尾色紙(個人蔵)